人間発達科学部

Faculty of Human Development

http://edu.edc.toyama-u.ac.jp/modules/myalbum/

混迷の時代を拓くのは「持続可能な自己教育力」

山西 潤一（やまにし じゅんいち）学部長

旧富山大学教育学部を母体に、新しく誕生した「人間発達科学部」。この名前には、さてどんな意味があるのだろう？そして、教育学部だった頃と何がどう変わるのか？山西潤一学部長に直接聞いてみた。

「人間には、子供から大人まで生涯にわたって、さまざまな発達段階で自分を高めるための『学び』があります。こうした多様な『学び』について理解し、その学習を支援して広く社会に貢献できる人材を育てることが、この学部の目標です」

中学・高校の教員免許は他学部でも与えられるが、小学校の教員まで含めた学校教員養成の機能は、専ら旧教育学部に委ねられてきた。人間発達科学部はこの重要な役割と、その中で培われてきた「よりよい教え手」を育てる教育技術の蓄積を、どこよりもそのまま引き継ぐ学部である。

一方で、急速に複雑化する現代社会にあって、必要とされる教育のあり方はかつてなく多様化している。これまで以上に実践的な力の養成が求められる学校教育に加え、企業内教育や生涯教育など、学びに対するニーズは着実に増しつつある。こうした中、重要なのは「持続可能な自己教育力」ではないかと山西学部長は言う。「誰かから与えられる知識を待つだけの受け身の態度では、変化の速い混迷の時代を生き抜くのは容易ではありません。いつでも状況を的確に判断し、適切な知識を自ら集め考えて周囲の環境に働きかけ、問題を解決できるようになることこそが、新しい時代を拓く『学び』の力なのです」

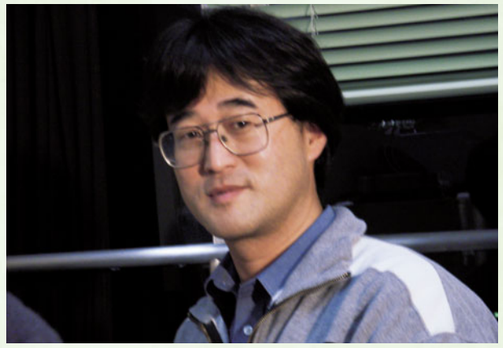
豊かな経験の上に教育人材を育成する「発達教育学科」と、現代の人間を取り巻く諸環境の変化に向き合う「人間環境システム学科」から構成される、新しい人間発達科学部のカリキュラムでは、学生が共同で課題を設定し解決に挑む「プロジェクト型教育」や、企業・公共機関等で実務を経験する「インターンシップ」も重要視されている。多様な体験を通じ、今を生きる人々や自らの中からも、気づかれぬまま埋もれている貴重な「知」を発見して社会に還元できるようになるのが狙いだという。

既存の知の再生産だけでなく、現実社会や自分自身の体験から日々自ら学び続けることのできる教育人材は、今後ますます必要とされることであろう。新たなスタートを切った人間発達科学部と、そこで育まれつつある学生たちの活躍に、心から期待したい。

（林 夏生）

双方向性の遠隔学習システムの構築

黒田 卓（くろだ たかし）助教授



人間発達科学部人間環境システム学科 黒田 卓先生の研究室では、コンピュータ端末とデジタルネットワークの先端技術を駆使した効果的な遠隔教育システムの研究開発を行っている。平成一二年より、NTT西日本富山支店の協力で富山遠隔学習研究会を立ち上げ、主に小学校で行われている「総合的な学習」の時間に遠隔学習法を採り入れる試みを始めた。（富山遠隔学習研究会ホームページ http://midori.edc.toyama-u.ac.jp/~kuro-lab/enkaku/）

情報発信元から提起された様々な問題（例：お米生産者の悩み）について、解決策（消費者側の考え方など）を児童達が考え、意見を出し合う。このシステムには、インターネットに接続したテレビカメラを使用した双方向性があるので、学級単位で浮かんだアイデアを発信元に投げ掛けると、児童達の考えた名案（迷案？）に発信元も教員もリアルタイムで対応することができる。児童の多くは情報発信元である現場からのエピソードにとても興味を持ち、また共通の話題をもとに思い思いの持論を展開できるとあって、議論も白熱する。個性的な視点で大人とは異なる発想をする児童もいるため、アイデアがひとつにまとまらないこともしばしばだという。

黒田先生はこうした取り組みを通し、情報だけでなくその場の雰囲気や感動をも伝えることができる学習支援システムの構築を目指して努力を続けている。学生に対しては、「コミュニケーション力を磨き、失敗を恐れず色々な事にチャレンジして経験を積んで欲しい」と熱く語られていた。教育工学のスペシャリストの分析に、大変共感した次第である。

（岩島 誠）

新たな幼児・福祉教育への期待

平川 毅彦（ひらかわ たけひこ）助教授

平川先生は旧教育学部では社会科教育担当でもともと地域社会学・社会調査法が専門であったが、この他に障害者福祉にも深い関心をもっており、両分野を融合させた研究成果を著書『「福祉コミュニティ」と地域社会』（世界思想社、二〇〇四年）にまとめられている。この一〇月人間発達科学部の発足とともに発達教育学科 発達福祉コースに所属された。この発達福祉コースでは、これまでと同様に養護学校教員・幼稚園教諭の免許が取得できるのに加え、新たに厚生労働省所轄の保育士の資格、社会福祉士の受験資格が得られるようになった。これらは社会ニーズの拡大に応じ、北陸三県の国立大学では初めて実現したものだ。単に取得できる資格を増やしただけではなく、本コースは特別支援教育、幼児・児童教育、社会福祉を三本の柱とし、学校教育と福祉との二つの視点をもち、知的障害児の就学前から就学時、卒業後生涯にわたって見通すことの出来る人材を育成することを目指しているということだ。

本コースでは教育学部が培ってきた附属養護学校・幼稚園を学生教育の現場として活かしつつ、*WEEネットとやま等と連携して実践的な教育ができるのが特徴だ。さらに、この度の三大学統合では、看護・保健関連分野はもちろんのこと、バリアフリー都市・住宅等を福祉的視点から開発するためにも建築関連学科との連携も大いに期待される。来年度「一期生」入学の準備にお忙しい中、平川先生にはコースの目指す夢を真摯に語って頂いた。

（森脇 喜紀）

*福祉・教育・就労ネットワークとやま

薬学部の新体制

畑中 保丸（はたなか やすまる）学部長

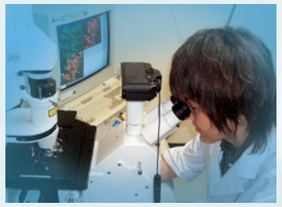
学校教育法が平成一六年に改正され、全国の大学における*「薬剤師養成のための薬学教育のあり方」が変わる。これまで、学部の修業年限が四年であったものが、より専門性を高めるために六年に延長されることになった。また、薬剤師法も改正され、薬剤師国家試験を受けることができるのは、原則として、六年制学部・学科の卒業者になる。

これらの制度改正をうけて、富山大学薬学部では平成一八年四月から入学してくる学生のために、薬剤師となるための六年間一貫教育を行う「薬学科」（定員五五名）と、企業で活躍する人材育成のための四年制課程の「創薬科学科」（定員五〇名）を同時に設置することとなった。

これまで、三大学統合前の薬学部においても、限られた人数（一六名）には、四年間の学部と更に二年間の修士課程で、より高度な薬剤師教育を行ってきた。大きな変更点は「薬学科」での一貫教育により、入学してくる五五名の学生に対して、高度な知識・技能をもった薬剤師育成ができるようになった点である。また、「創薬科学科」では「富山のくすり学」という全国的にもユニークな科目も開講しており、薬剤師としてではなく、薬学の専門的知識をもって企業や研究機関で活躍する人材を育成する。四年間の学部教育の後、大学院への進路も用意されている。

富山県においても、薬剤師の確保が困難になっており、富山大学薬学部でも卒業後も県内で薬剤師として活躍してくれる人材を強く希望しているそうだ。

薬学部は、明治二六年（一八九三）の共立富山薬学校の創立以来百年以上の伝統をもつ教育・研究機関である。創立にあたっては、富山県の薬業関係者の助力によるところが大きい。また、富山県内で薬剤師あるいは企業人として活躍できる人材を養成するため、地元出身の学生を歓迎しており、国際水準の教育・研究を行うとともに、地域との関係を重視する学部である。「薬は一つのモノである。モノについての深い理解と丁寧な扱いを目指す」との方針のもと、日々精力的な教育・研究活動が展開されている。



医薬の分業が進み薬物療法が高度化するなか、病院、地域の薬局および製薬会社などで国民の福祉に貢献できる質の高い人材の育成を新しい富山大学薬学部に期待したい。

（唐渡 広志）

*詳しくは日本薬学会ホームページ「薬学教育制度が変わります」をご覧ください。
http://www.pharmsoc.jp/hotnews/m_yakugakukyoikuhtml

生活習慣病の克服に向けて

笹岡 利安（ささおか としやす）教授

中央が笹岡先生

通常の薬学部では、疾病がどのようなプロセスで起きるのか、という視点をもとにした教育・研究が必ずしも多くなかった。自身が医学部第一内科で教鞭をとられた経験をもつ笹岡先生は、そこに重点をおいて研究室を運営している。医学部の協力により病棟で実際に患者と接する臨床実習の機会が設けられており、「病」の具体的な状態と向かい合いながら薬学を研究できるのがこの研究室の特徴である。

笹岡先生の専門は、二型糖尿病に関する研究である。糖尿病は、膵臓からのインスリン分泌不足とその作用不全により高血糖となり、しばしば合併症を伴う難病である。国内の糖尿病患者は、その疑いがある人も含めれば一三七〇万人以上いると言われ、国民病として関心が高まっている。笹岡先生は、高血糖の原因となる「インスリン抵抗性」に対する有効な薬剤の開発に携わっている。

笹岡先生が教育面で目指す目標は、疾病に対する深い理解をもつ臨床薬剤師・薬学研究者を養成することである。現在の医療現場は、一般の目にはどうしても医師と看護師の姿しか前面にでてこないが、薬剤師の立場を向上させることでより高度な医療の発展が期待される。

三大学統合を迎えたが、笹岡先生は他学部とともに「糖尿病をはじめとした生活習慣病での診断・治療を向上させるための新手法の開発を目指した共同研究を展開してみたい」という意欲を燃やしている。

（仲嶺 政光）

新たな研究テーマを探る

酒井 秀紀（さかい ひでき）教授

最前列右から2人目が酒井先生

消化管（胃や腸）は、ストレスや環境変化などの影響がもっとも早く現れる臓器。胃や腸の病気の原因の一つとして、イオンの分泌・吸収のバランスが崩れることがあげられる。研究室では、消化管の細胞でイオン分泌や吸収を司るタンパク質の研究を行っている。また、胃ガンや大腸ガンが発生するプロセスに関する新しいメカニズムの研究も行っている。消化管の新薬開発につながるアイデアを生み出すことが私たちのテーマ――と酒井先生は話す。

学生指導の基本は、学生一人一人の「個性」を大切にし、各人の個性が良い方向に大きく伸びるようなお手伝いをすることだとのことである。目指すべきは、謙虚な心を持ちつつ、他人に負けない自己アピールのできる人材づくりであるという。患者に不快、不安な思いをさせる身なりや態度は「個性」としては認められない。「流行だから、若いから…」などというのは問題外で、どんな場合においても患者の立場を熟慮し、温かい気配り、思いやりの心をもつことが薬学部生として守るべき医療姿勢である、というのがその理由である。

酒井先生は、三大学統合を機に、関連分野の研究者が協力して新たな共同研究体制を築き、世界をリードする成果を発信し続けられる富山大学を目指したい、という。「根ざすのは富山県、目ざすのは世界」。今後ますます世界に通用する大学になり、富山の存在感を世界にアピールしたい、とのことであった。

（仲嶺 政光）

富山だからできる価値をすこと見いだす

前田 一樹（まえだ かずき）学部長

芸術文化学部の核となる部分は、対学生、地域を含めて、自信を持てるように、誇れるものを作っていきたい。東京にないものが富山にある。それは富山の文化であり、地方都市富山の資源である。それは人であり、物であり、仕組みである。学生がこの芸術文化学部に入って生活すれば、この学部の環境と教育が、学生のやりたい、将来目標としている人物像の核となる部分を必ず育んでくれる。そんな学部を目指したいという気持ちが前田学部長から伝わってきた。

クリエイティブとは、考え方・見方をどう変えるかであり、この学部の使命は、学生の持つ考え方を広げてあげることである。例えば、コーヒーメーカーを単にコーヒー製造機械だと見るのでなく、「美味しひと時を作る道具」として考えればさらにいろいろなデザインが生まれてくる。一〇〇円引きを、一〇〇円off(値下げ)とするか、一〇〇円save(節約)とするかで考え方まで変わってくる。

Artは自己の追求であるが、デザインは作り手とメーカーと生活者を考えなければならない。前世紀(二〇世紀)は企業の育成のためにデザインをしたが、今世紀（二一世紀）は生活者のためにデザインしなければならない。

各コースで目指すものをきいてみた。

［1］造形芸術コース

絵画や彫刻などのファイン・アートから最新のメディア・アート、双方向性をもたせたインタラクティブ・アートなどを学ぶためのメディア・アーティスト養成コースで、アートを何に落とし込むかが一番の課題。

［2］デザイン工芸コース

工芸作家を目指すコースで、デザインにもユニバーサル・デザイン、サスティナブル・デザイン、エコ・デザインなどいろいろあるが、すべてのデザインは生活者を対象としたものでなければならない。

［3］デザイン情報コース

デザインのコンセプト考案力を学ぶコースで、グラフィック・デザイナーやパッケージ・デザイナー、Webデザイナーを目指す人向けで、デザインのもとになる構想や発想を重視する。

［4］造形建築科学コース

ソフトよりの建築を学ぶコースで、例えば昔銭湯だった建物を食堂に改築するなど、主目的をコンバート（変換）する建築学。医学とタイアップした住宅や壁などの建材も科学する。

［5］文化マネジメント・コース

価値のない物から価値を見いだすことを学ぶコースで、大伴家持などの歴史や地域文化を外へ伝えていく説明案内人を養成する。観光や文化事業などを通して世界を繋いでいくマネジメント能力を身に付けることができる。

最後に「富山だからできる価値を見いだす。それは環境なのだ。」と前田学部長は再度強調された。

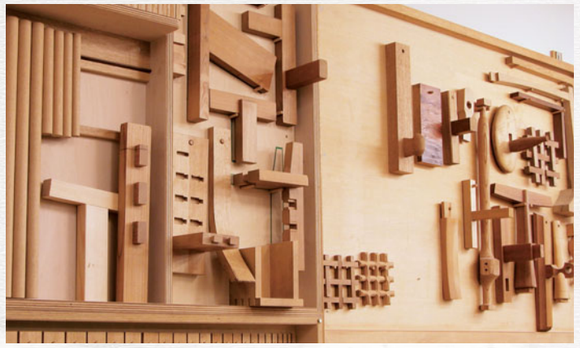
（高井　正三）

実践的な工芸教育の試み

小松 研治（こまつ けんじ）教授

芸術文化学部（旧高岡短期大学）の木材工芸実技室には、伝統的組み手の分解見本や、実際に触れて太さを実感できるサンプルなどが壁面一杯に設置されている。「学生に、見えない技能を可視化して見せ、理解と新しい発想を促す教育環境を作りたい。」と小松先生は熱っぽく語る。

研究室にはマンション用にコンパクト設計された壁掛け木製仏壇の試作品、椅子設計の際の参考用に、座面や肘掛の高さや背もたれ角度などを広範囲に調整できる椅子等が賑やかに置かれ、訪れた人の興味をそそる。



組み手見本

先生は東京芸術大学大学院美術研究科卒で一九八六年に着任され、その後スウェーデンの美術工芸学校へ留学。これを契機に学内を舞台とした家具・クラフト製品のデザイン・制作、および、地域と連携したものづくりの指導を行っている。

こうした取組が平成一六年度文部科学省大学教育支援プログラム、特色GPに「学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト」として採択され、トイレの絵文字、椅子、ゴミ箱など、多数の学生作品が学内で実際に使われだし、生活者の美意識向上が図られている。

一方、二〇〇三年には卒業生や学生の独立支援を目指した学内ベンチャー工房『ウロジ』を立ち上げ、現在複数の企業と共同開発を精力的に行い、成果を上げている。新大学では今以上の多様な連携を実現させ、これまでの取組をいっそう発展させたいとの抱負を語った。

（山田 茂）

本業は漆工芸。さらに新しいものづくりへ！

林 曉（はやし さとる）教授

林先生の専門分野は伝統工芸の中の漆工芸である。ふだんは木を削ったり麻布を漆で固めて作った素地に漆を塗って作品を制作している。現代では、工芸は絵画や彫刻のような〝純粋美術〟に比べると一段低いものと思われがちだが、明治になるまでの日本の美術は、もともと工芸的なものであったと林先生は語る。

近年コンピュータ関連の技術や製品開発が進み、漆工芸の分野でも応用できるようになってきた。器の形をコンピュータ上でデザインし、そのデータを読み込んで機械が木を削る。コンピュータと機械の導入によって、手仕事では発想し難い作品を作れるようになった。しかし最後の微妙な曲線の仕上げには手仕事が欠かせない。

新学部の創設記念展で、林先生と研究室のメンバーはなんと自動車の制作にチャレンジした。小型の電気自動車や福祉車両を生産しているメーカーと共同で、新型モデルのデザイン試作を行ったのである。漆工芸の型作りの技術を生かし、粘土で模型を作ったり、コンピュータでデザインして機械でモックアップを削りだしたのである。検討を繰り返して、いよいよ生産ラインに乗るところまでこぎ着けた。大手の自動車会社では難しいことだが、地元の企業と協力することで富山大学発のデザインが商品となることもある。新・富山大学では、機械工学や福祉の分野と連携することによって、もっと新しいものづくりにチャレンジできそうである。

（小林 真）

みら～れ！新富山大学広報誌

TOM'S PRESS

ISSN 1880−6678

VOL.2 NOV. 2005

生まれ変わった3学部

人間発達科学部「混迷の時代を拓くのは 持続可能な自己教育力」

薬学部「薬学部の新体制」

芸術文化学部「富山だからできる価値を見出すこと」

学生交流プラザ

みら～れ！新富山大学広報誌 TOM'S PRESS トムズプレス［vol.2］

発行日 平成17年12月22日 発行 国立大学法人 富山大学 ●問合せ先：富山大学総務部総務課広報室 〒930-8555 富山市五福3190 TEL 076-445-6027 FAX 076-445-6033 E-mail：kouhou@u-toyama.ac.jp ■トムズプレスはインターネットでもご覧いただけます。http://www.u-toyama.ac.jp/ 印刷・製本 株式会社ニッポー

大学がつなぐ富山と世界

――学術交流協定校の紹介――

Finland

ラハティ・ポリテクニク［フィンランド］

フィンランドのラハティ市にあるラハティ・ポリテクニクは総合的な高等職業専門学校としてデザイン、工学、福祉、美術、経営等九つの学部から構成されています。その教育内容は産業界の要望や地域社会の問題と連携したより実務的な実習を重視したものです。本学との友好協力協定の締結は一九九七年に始まり、現在まで本学からの派遣留学生は一八名、ラハティからの受け入れ学生は一五名を数えています。一九九八年からは学生作品展を相互に交換展示し、芸術文化の面での交流を深めているところです。

作品を前に話し合い（ラハティにて）

国民大学校［韓国］

国民大学校は一九四六年に開校した総合大学で、植民地からの解放後最も早く設立された私立大学の一つです。ソウル中心部の北側五㎞程度にあるキャンパスは、韓国首都圏内唯一の国立公園の中に位置しており、環境にも恵まれています。

現在は一〇の学部、一四の大学院のほか多くの研究施設を有し、学生数は一二五〇〇人にのぼります。富山大学との間には交換留学や研修旅行で毎年多くの学生の往来があり、ソウルと富山で互いの社会や文化について熱心に学んでいます。

国民大学からの交換留学生と富大生が、互いの民族衣装を交換して記念撮影

国民大学校の中にある社会科学大学（日本で言えば社会科学学部に相当）ビルです

Korea

TOM'S PRESS Q&A

Q. 富山大学に入学したら、どんなところに留学できるのですか？

A. 富山大学は、世界の様々な大学と学術交流協定を結んでいます。大学同士の交流協定を結んでいるのは、9カ国の28大学です。また、特定の学部や研究所と交流協定を結んでいるのは、15カ国48の学部や研究機関です。これらの中には留学生を受け入れているところもあり、留学中に取得した単位を富山大学の単位として認めることができる場合があります。留学に関しては留学支援室（076-445-6082）までお問い合わせ下さい。

［編集後記］

まだ、新学長も決定していなかった五月に行われた第一回編集委員会から早くも半年が過ぎ、新富山大学広報誌TOM'S PRESSも創刊第二号となりました。この間、「新大学広報誌のミッション」から議論をスタートし、広報誌名の選定、表紙の選定、編集方針の決定、取材及び記事の執筆など関係者の努力により、やっとここまで辿り着いたという感があります。ただ残念なのは、新大学の開学から三ヶ月以内に創刊第二号まで出すという時間的制限の中に、「新大学広報誌はいかにあるべきか」という根本的議論が埋没したという思いを持つのは私一人ではないと思います。この熱い議論の中に、さらにはその延長線上に、「単なる地方広報誌」から、地域のそして全国の志のある青少年に「この大学に入学したい。」と思っていただけるような夢のある魅力的な広報誌に、そして富山発の全日本、さらには全世界へ向けての情報発信の基幹誌として発展していくための方法論が生まれてくると信じて、さらなる魅力ある誌面づくりを目指したいと考えています。（M.K）

●本誌は、大学構内などで無料配布しています。郵送のご希望もお受けいたします。
●本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。
●無断転載はご遠慮ください。
●本誌は、古紙100%の再生紙と大豆インクを使用しています。

TOM'S PRESS 編集委員会

林 夏生 人文学部助教授
岩島 誠 薬学部助教授
五十嵐藤子 附属病院副看護部長
小林 真 人間発達科学部助教授
山田 茂 工学部助教授
高井 正三 総合情報基盤センター教授
唐渡 広志 経済学部助教授
小松 研治 芸術文化学部教授
仲嶺 政光 生涯学習教育研究センター講師
森脇 喜紀 理学部助教授
門脇 真 和漢医薬学総合研究所教授
長島 寛 総務部総務課長
鏡森 定信 医学部教授